



[令和 5 年 9 月 13 日 定例会発表要旨]

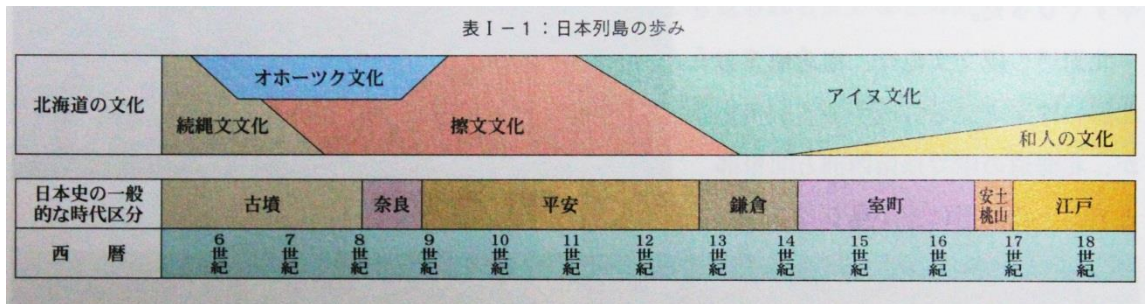
テイネのアイヌ史

手稲郷土史研究会 会長 沖田 紘 昭

今年の研修旅行が二風谷コタンと決定し、その一助になればと私の 3 年越しになる研究内容の一部を発表させていただくことにした。

1 北海道考古学歴史年表への疑問

考古学年表ではアイヌ史は 13 世紀ころから明治までとなっている。しからばそれ以前の擦文時代、続縄文時代、縄文時代晩期はアイヌ史ではないのかという疑問から私の研究は始まった。研究といっても私の場合は先人のご苦勞の産物である御本を読ませていただくことしかできないことをお断りしておく。



公益財団法人アイヌ民族文化財団・著「アイヌ民族:歴史と現在」6 ページより引用。「表 1-1: 日本列島の歩み」

2 「アイヌの歴史」海と宝のノマド（瀬川拓郎著）に学ぶ

瀬川氏はまずアイヌ社会も和人の社会となんら変わる事のない格差社会であったことを説明する。その起源は、日本史の弥生時代に並行する北海道の続縄文時代で、米と鉄器を希求する社会へと変化していく。そして擦文時代にはほぼ全道に鉄器が行き渡り土器文化は終了する。

2-1 アイヌは宝を求め北海道全域からサハリン、シムシュ島までの広大な空間を往来する海と宝のノマド（遊牧の民）だった。

「11 世紀、ワシ、タカ羽やクロテンの毛皮、更に中国製品を入手するためサハリンへ進出を開始。13 世紀、アイヌが海を渡ってニプフの打鷹人を虜にしたため、その後元軍と半世紀にわたって戦う。北の狩猟採集民を虜にした宝と、宝が生み出した格差社会「もてる者」と「もたざる者」の社会が始まった。アイヌの首長はまず宝によって隷属者ウタレや妻妾を獲得する。次にウタレや妻妾は首長の世帯の労働力となって生産活動・交易活動を拡大する。そして主張は、それによって得た宝でさらにウタレや妻妾を獲得する。」

瀬川氏はまたアイヌ社会の出現をエコシステムから読み解く。

自然との共生、平等、平和の世界観（縄文エコシステム）から、生態系への圧力になっていた偏向した狩猟漁労・富の蓄積・侵略の常態化の世界観（アイヌ・エコシステム）へ移行したと捉え、さらに、アイヌ化の第 1 画期、続縄文人が選択した狩猟採集文化。第 2 画期は、9 世紀末の交易品となる特定種の狩猟漁労に特化する体制＝アイヌ・エコシステムの成立した時代。と説明する。

2-2 アイヌが周辺や辺境という考えは、日本という天皇を中心とした文明の中だけに存在する。この虚構を削ぎ落し日本を相対化しなければ、アイヌの主体的な歴史、つまりアイヌ史は成立しない。しかし、文字を持たないアイヌの歴史研究で中核的な役割を担っているはずの考古学は、この点についてはまったく無自覚であった。「アイヌ文化」の成立は、すべて日本へ従属してゆく過程・前史として疑いもなく説明され、日本からの視点を超えるアイヌの歴史像を提出しようという動きはなかった。

2-3 結論：本書では、日本という「文明」にむけて、自然の一部として未開視されてきたアイヌを「文明」として突き返す作業を試みたいとおもう。エコロジカルなアイヌ像ではなく、宝を求めて異文化と交流しながら、激動の世界をしたたかに生き抜いてきたアイヌの歴史を提示したい。

3 アイヌ語の誕生と口承文学の隆盛の時代を探る

アイヌ語はいつごろ誕生したのだろうか。私の考えでは、縄文人が集落をつくり定住を始めた時には既に言語は存在していたのではないか。その「縄文語」から縄文中期以降にアイヌ語が形成されていったのではないかと想像してみる。

縄文時代はその中期が最も繁栄した時代で、日本全土でも特に東北地方に人口が集中していた。晩期にかけて寒冷化がすすみ縄文時代で最も困難な時代に入る。続縄文時代には、石狩低地帯のアイヌ民族は南下を始め、東北北部に進出、数世紀の間に東北にアイヌ語地名を残す。山田秀三氏の研究に残された手稲地区のアイヌ名も、紅葉山遺跡にみる高度に発展した定置漁労施設の存在も、縄文中期以降営々と受け継がれてきたアイヌ語とアイヌ社会の実像ではなかろうか。

3-1 手稲に残るアイヌ語地名。「東北・アイヌ語地名の研究」山田秀三著。「石狩暦」に発表された井口利夫氏のモリ、軽川、トウシリパオマナイの謎。

3-2 手稲区、西区の遺跡の位置（縄文時代、続縄文時代）埋蔵文化財資料より。

石狩紅葉山 49号遺跡報告書にみる縄文人の生活：この遺跡形成は5000年前、縄文前期と考えられる。シジミの検出。最大の成果は縄文中期から後期初頭の漁労遺構（えり）11基の発見。

発寒川は、この時期本遺跡に最も接近し発掘区西側で砂丘に突き当たり、そこを屈曲部として西から南へ流向を変え、縄文人に良好な漁場環境を与えた。しかも定置漁労施設であり、完成度が高い。川を横断する杭列の上流側にしがらみを付けるものである。先住民アイヌの使用していたものと同様である。しがらみは2種類あり、ウグイ、サケマス用と考えられる。1シーズン12,000尾程度の漁獲も可能であったと思われる。

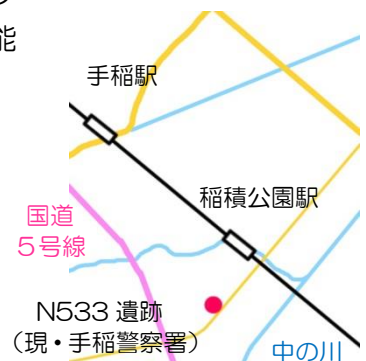
手稲 N533 遺跡報告書：第5層は縄文早期後半から中期末・後期前段遺稿遺物が発見されている。第3層は続縄文時代の遺物が出土している。

4 英雄叙事詩ユーカラを読んでみた

完璧に読んだわけではないが、驚くべき事実があった。英雄ポイヤウンペが、浜益の黄金山の麓シヌタブカに育ち、浜益川河口のト



石狩紅葉山 49号遺跡
(石狩市花川 435)周辺地図



手稲 N533 遺跡
(手稲区富丘 1条 4丁目)周辺地図

ミサンペツ（軍勢を出したる所「北海道蝦夷語地名解」永田方正著）から出陣して数々の戦果を挙げたのである。虎杖丸の曲では石狩人、余市人など石狩湾周辺の勢力の連合体が、レブングル（沖の人）連合体と戦う様が延々と語られる。この事実は、知里真志保説「英雄叙事詩はオホーツク人（レブングル）と擦文人＝北海道アイヌ（ヤウングル）との抗争を描いたものである」を髣髴とさせる。

4-1 「アイヌの物語世界」（中川裕著）

カムイの世界＝神謡

人間の世界＝散文逸話（パナンペ、ペナンペ など）

超人の世界＝英雄叙事詩（道央、道西の英雄叙事詩の主人公はポイヤウンペ、住居はシヌタブカ（浜益）、トミサンペツ）ときまっている。

4-2 ^{いたどりまる}「虎杖丸の曲」

「アイヌ叙事詩ユーカラの研究」1931（昭和6）所収。金田一京助氏が1913（大正3）年に、平取で筆録したもの。本文は370ページの大作だが、その粗筋が「古代蝦夷の英雄時代」（工藤雅樹著）の171ページより181ページまで載っているため資料とした。

5 終わりに

これらの先人の研究者の情報を読ませていただくと、結論としては北海道のアイヌ史の始まりは遅くも縄文後期であり、それ以降は明治まですべてがアイヌ史であると云えるのではないかと。さらに瀬川氏が、知里幸恵の神謡から連想される社会を縄文エコシステムとし、アイヌ・エコシステムが格差社会であったとする説は私としては初見であり、大きな刺激を受けた。

レポート 研修旅行記 二風谷でアイヌ文化と歴史を学ぶ

9月25日穏やかな秋晴れのもと、今年は足を延ばして平取町二風谷への研修旅行となりました。

昨今のアイヌブームに乗じてより深い知識を深めようと参加者28名（当日2名不参加）一路二風谷へ。途中バスの中では平取牛やトマトなど地元特産を紹介、アイヌ口承文芸の朗読など。沙流川の畔にチセが点在するコタンが迎えてくれました。

1万年以上も前から繋がっているこの地は今なお、アイヌの人たちが世代を超えて伝統や精神を守り続けています。過去と現在の歴史をそのまま体現できることに不思議な感動を覚えます。



二風谷アイヌ文化博物館で長田さんの説明を聞く参加者の皆様。



二風谷コタンにあるチセ。



チセで貝澤さんからアイヌのお話を聞くことができました。

二風谷アイヌ文化博物館では学芸員の長田さんの説明がとても丁寧で分かりやすかったです。個人的には儀式に使う箸の文様や謂れ、また日本で一番大きな丸木舟は圧巻でした。舟の内側の舳先より三尺くらいのところの横棒の取り付け方に質問が多かったのですが、一方は深くもう一方は浅

く、それぞれ穴を掘り、取りつける横棒を深い方の穴に差しこんで、それを戻しながら浅い方の穴にぴったりとはめこむ「^{ませんぼう}既栓棒方式」とのことでした。

チセの中での貝澤さんのお話はアイヌの歴史を現在のロシアとウクライナに重ねて語り、アイヌの方の本心と向き合い、ここにきた意味を深く感じました。今回一番印象深く貴重な時間だったと思います。



萱野茂二風谷アイヌ資料館を見学。

萱野茂二風谷アイヌ資料館は萱野氏が40年もの年月をかけて集めたアイヌの民具が展示されており、そのうちの1121点は国の重要有形文化財の指定を受けています。萱野氏はアイヌとして初めて国会議員になり、北海道旧土人保護法を廃止し、アイヌ文化振興法の成立に尽力を尽くしました。このことは敵陣に一人飛び込んでチャランケで和議を持ち込んだと形容しても良いのではないのでしょうか。アイヌとしての誇りを復権し貴重な文化を守

った証を間近に感じました。

私たちは歴史を学びながら今の自分と向き合う大切さを知るべきです。過去の時間は失われたものではなく現代に脈々と繋がっています。アイヌの人たちが守ってきた魂を知ることによって今の時代にこそ、必要なことが見えてくるような気がしました。

帰りのバスでは時間の関係で義経神社を素通りしつつも、会員の一ノ宮氏の義経伝説の講話、地質学の若松氏の二風谷周辺の地殻構造、青虎石などの興味深い研究発表に耳を傾けました。



館内にはアイヌ民族、世界の民族、萱野氏に関する展示がありました。



二風谷アイヌ文化博物館前で記念撮影。

高速道路での事故の影響で到着時間が遅れましたが、乗客の皆さん無事帰途につくことが出来ました。今回は新人研究部員、初めての取り組みだったので、行き届かないところが多々ありました。

皆様の温かいご協力のもとに終わることが出来ましたことに深く感謝します。（手稲郷土史研究会 会員 諸橋 弘子）

★北海道新聞、読売新聞にて「北日本飛行学校物語」の記事が掲載されました。

2023（令和5）年9月2日土曜日の北海道新聞朝刊14面、9月30日土曜日の読売新聞24面に著者であります茂内義雄先生のインタビューとともに「北日本飛行学校物語」の紹介記事が掲載されました。ぜひご覧くださいませ。

「北日本飛行学校物語」は昭和初期の手稲区にあった飛行学校の歴史について記されており、当研究会会員も制作に携わっております。詳細ご希望の方は、実行委員会の釣本峰雄さんまでお問い合わせくださいませ。



次回定例会 ⇒ 発表内容「乗り越えた天寿「北日本除雪機の再建」」平木重雄（手稲郷土史研究会 会員）

11月8日（水）18:15～ / 手稲区民センター 2階 第1・第2会議室 ※会員以外方のご参加は事前申し込みが必要です。

手稲郷土史研究会 会報「郷土史ていね」第186号 令和5年10月11日発行

発行責任者：沖田紘昭（手稲郷土史研究会 会長） 編集：岡和田夢子

〒006-0818 札幌市手稲区前田8条11丁目4-5 林俊一方 手稲郷土史研究会 ☎TEL 090-3381-4994 ☎FAX 011-682-9874

✉メールアドレス teinekyoudoshi@gmail.com <担当 岡和田>